

【ぶたひめ】

春真っ盛り。

隣のお姉さん（山本富士子さん）が、叔母さんの看病で町に行ったはずなのに、すくなくとも一ヶ月は行っているときいていたのに、どういうわけか村の広場で見かけたという人が続出しました。

ぼくが、

「ひとちがいじゃろ」

というと、

「あんな美人、この村にはあの人だけじゃ」

とこたえる。

たしかにそうだ。

それで懐爺にきいてみました。

「それは【ぶたひめ】ですよ」

と懐爺は即座にいいました。

「【ぶたひめ】たあ、ぶたのひめのことかい」

「美人に化ける雌豚（めすぶた）のことです」

「そらあおもしれえ。わしもあいたいもんじゃ」

けれども困ったことに【ぶたひめ】に惚れる者が続出して、あげくは求婚ということに発展しました。

隣のお姉さんは、ぼく以外の男性をめったに寄せつけないのですが、【ぶたひめ】は自分から若者に寄っていくのです。

「発情（はつじょう）してます」

と懐爺はいうのだが、発情と蒸発（じょうはつ）の区別がつかないぼくは、

「はっはっ」

と笑うばかりです。

求婚した者のうち、【ぶたひめ】はお金持ち（さすがにお金持ちだけあって、気味のわるいおやじばかり）三人を選び、難題（なんだい）を出して、三日間でそれに対応できた者のところへ嫁に行くと断言しました。

ぼくは漫画で読んだ『竹取物語』をおもいだしましたが、

「わしにはかんけいない」

でも、この結末をこの目でたしかめたいので、懐爺の段取りで、【ぶたひめ】のそばにいつもいられるようにしてもらいました。

さて【ぶたひめ】の難題とは。

権助には、

「茸（きのこ）のうんこを持ってくること」

伝助には、

「筍（たけのこ）のうんこを持ってくること」
勘助には、
「蕨（わらび）のうんこを持ってくること」

三日後、三助は各各うんこを持ってきました。
「これはほんとうに、茸のうんこですか」
疑り深そうに【ぶたひめ】がきくと、
「まちげえねえ、この饅（す）えた臭いでわかるじゃろ」
と権助。
「これはほんとうに、筍のうんこですか」
疑り深そうに【ぶたひめ】がきくと、
と伝助。
「まちげえねえ、この膨大（ぼうだい）な量でわかるじゃろ」
「これはほんとうに、蕨のうんこですか」
疑り深そうに【ぶたひめ】がきくと、
「まちげえねえ、この醜い形でわかるじゃろ」
と勘助。

しばらく沈黙（ちんもく）していた【ぶたひめ】は、突然怒り出し、「この饅えた臭い、この膨大な量、この醜い形で、はっきりとわかったぞ。嘘つきおやじども、くそつたれおやじども、おまえたちは、そこの豚小屋から、持ってきたんだね。これらはまちがいなく、三つとも、あたしのうんこだよ」